

プログラム・ノート

解説=柴田克彦

| チョン・ミンのタクトが紡ぐ音楽の多様性

今回の「平日の午後のコンサート」のテーマは〈マエストロの旅〉。アソシエイト・コンダクターのチョン・ミンが、様々な国の音楽を聴かせます。

前半は初期ロマン派の音楽。ここでは、フランスの作曲家ベルリオーズのローマを題材にした音楽、ドイツの作曲家ウェーバーのボヘミア（当時はドイツ圏だが、本来はチェコに属する地域）を舞台にした作品、イタリアの作曲家ロッシーニのスイスを舞台にした作品（しかも初演はパリ）が並んでいるのが面白いところ。さらに後半は、チェコの作曲家スメタナの代表作と、近代ロシアの作曲家ストラヴィンスキーがパリで生み出した作品です。この多様性や国際性が興味をかきたてると同時に、管楽器が活躍する色彩感と迫力充分の音楽という共通点もあって、輝かしい響きやドラマティックな展開に浸ることができます。

ここは、マエストロの劇的構成と東京フィルの各セクションの名技を味わいながら、大家たちのオーケストレーションの妙を満喫することにしましょう。



アルプス山麓、ルガーノ湖畔にあるスイスの英雄ウィリアム・テルの像。弓矢の名手で、悪代官ゲスラーの姦計にも屈せず息子の頭上のリンゴを弓矢で射抜いたエピソードが有名です

Image ID: 105950911 / Copyright Valeriy Tretyakov | Dreamstime.com https://www.dreamstime.com/byvalet_info

華麗なオーケストレーションによる活気漲る序曲

幕開けは、フランス初期ロマン派の革新的作曲家エクトール・ベルリオズ (1803-1869) の序曲『ローマの謝肉祭』。1830年初演の『幻想交響曲』で名を上げたベルリオズは、オペラでの成功を期して、1838年に『ベンヴェヌート・チェッリーニ』を完成しました。しかし同年パリにおける初演は不成功に終わり、間もなく打ち切りとなってしまいます。そこで失地を回復すべく、同オペラの劇中の素材を用いて演奏会用に作曲した(「元々は第2幕の序曲として書かれた」との説もあります)のがこの曲。1844年に初演され、今度は大成功を収めました。オペラ自体は、「ルネサンス時代のイタリアの彫金師チェッリーニが、苦難を経てペルセウス像を完成し、愛するテレーザと結ばれる」といった物語で、本序曲にも作曲者がイタリアで見た謝肉祭の印象が反映されています。

曲は、作曲者一流の華麗なオーケストレーションが生かされた、活気漲る音楽。激しく始まり、すぐにテンポを落として本編の「愛の二重唱」の旋律がイングリッシュ・ホルンのソロを主体に奏されます。やがて快速部分へ移行。「謝肉祭の合唱」に基づく旋律に続いて、イタリアの急速な舞曲サルタレロ風の賑やかな音楽となり、熱狂の度合いを高めていきます。



“ドイツ初の国民オペラ”を凝縮した劇的な音楽

おつぎは、ドイツ初期ロマン派の作曲家カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786-1826) の歌劇『魔弾の射手』序曲です。本オペラは、ウェーバーの代表作にして、“ドイツ初の国民オペラ”と称される記念碑的な一作。1821年に完成され、同年ベルリンにおける初演で、画期的な成功を収めました。本編はボヘミアの森に囲まれた農村が舞台。「恋人アガーテと結婚するために射撃大会



での優勝を余儀なくされた猟師マックスが、必ず当たるといふ悪魔の弾丸を入手。大会でそれが発覚して窮地に陥るも、アガーテの純愛に救われる」といった物語です。

序曲は、オペラ全体の内容を凝縮した劇的な音楽。クラリネットが際立った活躍をみせます。まず遅い序奏で深い森が描写され、4本のホルンによる有名な旋律が奏されます。不気味な音楽を経て快速調の主部に移り、マックスの絶望の歌に基づく激しい主題と、アガーテの歓喜の歌に基づく優しい主題を主体に進行。悪と善が葛藤するかのような音楽が展開されます。そして堂々たる終結部で愛の勝利が謳い上げられます。

颯爽とした行進曲でおなじみの序曲

前半最後は、イタリア初期ロマン派オペラの大家 **ジョアッキーノ・ロッシーニ** (1792-1868) の歌劇『**ウィリアム・テル**』序曲。ロッシーニは、37歳時の1829年にパリで初演された本作をもって40本近いオペラの創作を終え、残る



約40年の人生は、宗教曲や小品を作曲しながら悠々自適で過ごしました。本オペラは、スイスの独立を勝ち取る勇敢な人々を描いた、シラー原作の英雄劇。主人公が息子の頭に乘せたリンゴを矢で射る場面で有名なお話です。ただし長大な全曲はあまり上演されず、序曲だけが断然の支持を得ています。

序曲は、物語に沿った4つの部分から成る小交響曲風の構成。**第1部「夜明け」**(タイトルは通称)は、独奏から五重奏に発展するチェロを中心に、スイスの夜明けが描かれます。**第2部「嵐」**は全楽器での激しい描写。フルートの小鳥のさえずりを経て、**第3部「静けさ」**へ移り、イングリッシュ・ホルンが美しい牧歌を奏でます。**第4部「スイス軍の行進」**はファンファーレに始まる急速な行進曲。広くおなじみの颯爽たる音楽です。

モルダウ川の流りに託された祖国愛

後半は、チェコ国民主義音楽の父**ベドルジーハ・スメタナ** (1824-1884) の**連作交響詩『わが祖国』**より「モルダウ」でスタート。スメタナは、歌劇『売られた花嫁』で名声を築いた後、聴覚を失うという悲劇に見舞われます。そうしたさ中の1874～79年、チェコの歴史や自然を描いた6曲が連なる交響詩『わが祖国』を作曲。この作品は、当時オーストリアに支配されていたチェコの国民愛を高め、同国の象徴ともいべき存在となりました。

その第2曲「モルダウ」は、中でも有名な1曲。チェコのボヘミア地方の中心を流れるモルダウ川（モルダウはドイツ語名で、チェコ語ではヴルタヴァ）の流れや周辺の情景が、音で表わされます。

まず2本のフルートで源流が示され、クラリネットが吹くもうひとつの流れと合わさって川になります。次に奏されるなめらかな旋律が、川の流れを表わすメイン主題。続いてホルンが森の狩の角笛を表し、楽しく弾む田舎の婚礼の踊り、夢見るような月の光と妖精の舞い、突然激しい音楽となる聖ヨハネの急流、メイン主題が明るく奏されるプラハ市内、堂々としたプラハの城ヴィシエフラドと場面が変わっていきます。



色彩感と清新さに溢れるバレエ音楽の傑作

締めくくりは、20世紀音楽をリードしたロシア生まれの革新的大家**イーゴリ・ストラヴィンスキー** (1882-1971) の**バレエ組曲『火の鳥』**。パリで旗揚げしたロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフの委嘱による、ストラヴィンスキー三大バレエの第1弾にあたる作品です。ディアギレフは、当題材によるバレエの音楽を別の作曲家に依頼したものの、首尾よく運ばず、結局ストラヴィンスキーに白羽の矢を立てたとい



われています。本作は1910年に完成。同年パリにおける初演で大成功を収め、当時無名の若手ロシア人作曲家は、時代の寵児へと踊り出しました。物語は「凶悪な魔王カステイの城に囚われていたツアレヴナら13人の王女を、イワン王子が火の鳥の力を借りて救い出し、彼はツアレヴナ王女と結ばれる」といったロシアの古い民話に拠るもの。ロシア民謡を活用した音楽は、民族的な色彩感と清新さに溢れています。

ストラヴィンスキーは、約50分の全曲から、1911年版、1919年版、1945年版の3つの組曲を作成しました。中では、当初の4管編成から2管編成に直され、かつ曲数も手頃な1919年版の演奏機会が最も多く、今回も同版が用いられます。

低音弦楽器の弱音の動きが不気味な「序奏」に始まり、火の鳥が登場して踊る「火の鳥の踊り」と「火の鳥のヴァリアシオン」が続きます。ここまでは完全に切れ目なく演奏される精緻極まりない音楽です。次いで、オーボエがロマンティックなソロを奏でる「王女たちの Rond (ホロヴォード)」、激しいリズムと響きによる「魔王カステイの凶悪な踊り」が登場。後者でクライマックスが築かれます。それが静まると、ファゴットのソロが優しく歌って魔王一味を眠らせる「子守歌」に移り、出だしのホルンのソロや7拍子の運びが特徴的な「終曲」で、王子と王女が結ばれる輝かしい大団円を迎えます。

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、Web、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）、「吹奏楽編曲されているクラシック名曲集」（音楽之友社）。